

35

30

25

20

15

10

天水抄

乾

坤

津田文庫

文庫 1

1695

1629



星宿圖

## 天水之卷之上

早稻田大學  
圖書館藏書倉持氏印  
フた文庫

一  
 今之財初の連歌へ作曲を事。主度の老令者  
 宮道が云ふかく、而此二句りか句ごとくまで延てクセは  
 聖歴初のちきに當りハ四葉の歌をもつてよし宮道が云  
 ふかくまで二句でりよ又其をせばようう初のじ  
 あらすもあらハ西不一方ほを教すと例のあらす  
 一  
 宮道二のれまで花の句あらんハこのれかく歌不を  
 まづき。序あざれいと切つ手をあざれいとて  
 その句をやまびやうと代の句歌を付すとくもけ。家  
 づくもくべ用ひむのこきと分あつてあらす  
 をあらすとまほの宮道の句あらすとつ手をかねえのあ  
 一  
 まほきのあらすの財をまかすと事のあく和(國)のあ

一あはれも耶をたゞして絶くの筆すらもあらず  
執筆文臺便憲代とありひ并にむかひや志哉

かく見詠ともうて

一けくよけくもひあくたまもすかのまく  
及ひるをせよまく三事あれまゆきのりとすてまく  
もくよの日とし無とせぬゆくちくいもかまく  
もくゆくもくとむな日のあゆくもすまくとくのを  
くのまくとせんとくのを  
とくのをくとくのを

かくあひ鳴づく枝の田と川  
かくあひてかく又詠すよひ

出見花林夜月

1621

生蓮のやあひ草とあひがくよ夜の夢の夜月とす文

若き守て月とるをすみはれ

一

ちゆすもすみすみすみすみすみすみすみすみすみす  
つまちゆすもすみすみすみすみすみすみすみすみすみす  
ちゆすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみす  
みすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみす

一

ゆすもすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみす  
みすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみす  
みすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみす  
みすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみす

一

ゆすもすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみす  
みすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみすみす



つままで思ひの奥底を傳へむ「ちの御ハ御  
ちもとゆるのあられす翼」と云ふの上にかゝり  
只事あく舞せりといふ者すち事と傳せられ我天より  
若(一ノ頃)とて仰述の事と教への後(詳記を要)  
て之舞、詠可と云又替玉謡ともいふはき方す  
有く天てある羽うちやもとやす皆君候萬葉て書を  
かくと死とされと云ふ事ありて其事とひの御て  
傳せり。もと一金をたゞうけよばれあせじ。是とねど  
ちふやく御は候事とてかくと云ふ事すみとぞ  
アサヒ若(一ノ頃)とて度々之代とて人一家(ふくわや)  
ゑつめく力むろとくらしよざれ明りの軍すが射  
さるまくあがのうたれなまゆる人と云乎之代す

是とゆふとて左<sup>サテ</sup>明りの軍と死ぬ事と云ふ事  
つそれと教へらるの事すまくと云あひて合戦す  
及<sup>シ</sup>敵すれぬつちとそれ皆相とゆき争拏斗と放<sup>シ</sup>と  
さきハ御の脚とも者かよの地と御<sup>シ</sup>おもて御<sup>シ</sup>おもと  
一賈鳥<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>畜<sup>モ</sup>池牛<sup>ト</sup>傳<sup>ハ</sup>敵<sup>ク</sup>月<sup>ニ</sup>と云詩<sup>ハ</sup>化<sup>ア</sup>て放  
くとさすと放<sup>シ</sup>化<sup>ア</sup>キ<sup>シ</sup>やうと云事<sup>ト</sup>頃もす矣す車  
の板と走<sup>リ</sup>走<sup>リ</sup>とてうつす度百尺窄<sup>ト</sup>於<sup>シ</sup>韓<sup>近</sup>  
ミ右向れ、敵<sup>ト</sup>まよ<sup>ト</sup>と云<sup>ト</sup>、れ<sup>ハ</sup>收<sup>ヒ</sup>す放<sup>リ</sup>て一  
朝我師と云<sup>ト</sup>二字の思<sup>ト</sup>まよ<sup>ト</sup>と云<sup>ト</sup>、事<sup>ト</sup>名<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>と  
とくとくのうのノ<sup>ト</sup>師<sup>ト</sup>のまよ<sup>ト</sup>と云<sup>ト</sup>多<sup>カ</sup>き事<sup>ト</sup>多<sup>カ</sup>き事<sup>ト</sup>  
人<sup>ト</sup>多<sup>カ</sup>き事<sup>ト</sup>人<sup>ト</sup>西歎<sup>ト</sup>と云<sup>ト</sup>と云<sup>ト</sup>私<sup>ト</sup>と云<sup>ト</sup>私<sup>ト</sup>

のやまやまとあきらめと諦めと師の悔いに  
ちようてあらは始まつたのつ根と魂とあざむきて  
後悔あるとの事、家筋は師の世の運うよとくの  
御成りとがくらひるの品々と見ゆる  
あひとぞりけ出でるもとれども社をもたらしの師は仕若  
一そくすまえもあととんじたし般うそもぬまへ一筋  
送とたゞし乍らふるぬれあらも心をもとねまうま  
又はもくまくにわすれ居る居き全て拂舞するき病め  
社をねじまくほせたんのかよの事もとまへ  
きよかと事務所附の御事へ重みのぬくも強猾よび  
ま送とねもの中もと自らのとあく送代極めとあく  
人を下すが信頼の人の肩へ寄りかう半日の速き際

をやへと傳の浦とお向ふ船と引まく功ある事な  
きがあくとせ詔令とらも後ふるひめハ夙夜の之難の浦  
津利よもとをとて浮くとを用ひての和とる  
とくにかのねのゆれも出立するの浦あるて東キよ  
ぬ波とくに相ひの老人とばくかとよせんといふは  
くさりとくに相ひの老人にばくかとよせんといふは  
界のじゆすいのまきとしもりのゆくと同  
れがよ様と石けりゆと音と物とがくの儀と  
とくあると云はれりとくと御新様御内裏假りとあら  
前席の蒲團と枕支座とお机のを御室と安ら  
まつあすて出殿のあとと御室と御室と御室と

聞く間と見合ひ候を淨化候トバ此死後ト云  
音字すむ皆のうへる事無也多々もしく考究す  
事ハ未遂の事もあらず又カクサはけて地もき  
天尊ニ迦羅葉薄頭尊もとて一粒の本實を齋  
善と曰す。されどシテ、草シヒツハ本實と云ふや  
け者のみやけりやなまの其の上あると申すやう  
シモの者有シモをハナテ極も前常せりてゆると前  
之處不思議とぞくち仰頭とぞまほとあうばす  
佛子ノ我を以てスルの詞と仰てお詫り  
かくし得りゆのアホニ  
トアミハ佛說ナリセリ。亦モ釈迦も曰くやか僧乃  
掌主の而遠めかくニ付佛法の方遠是を諦計の如く

檀那弟のや師の意ん所く檀那又意と申のりれ  
耶師と申せば地獄の底ニ至る事有て是  
家石子を付事さるニ事象の萬法を以て悉く解らる  
キトアモリキニ事象もく、事象が生るやうに預言師  
往生をニ除歎ニ付さる之を虎威より也。法主御師お  
付さる事のモヤリノ神妙かのどあれ、対記ノ御  
もあしく音字有シソノ多シ付とモロツ付と  
人ハ稀ナリ。大畠自身の細かくそそぎえもナ  
和音ヲ御通リ。ヤハヤセモモロヒト時代の傳教の  
根柢と仰る。汝あり事象有シ。以てニ降臨事象  
と云ふ魔室ノ師と付文も。年も未だ十才と  
紀もあれ世の自性の事。我も云う事清きと早速

鳴呼角すあらひやうせきと書と集て曰く  
もむ取まわせん人「なう御」紙本家の邊男、  
及まひちりせりから兵船等の地と略て集てを承る  
日もよく往きてヒト竹うち戸向北少ち柳生の寺方  
室主の隣官屋のものとても家とては傳ふる  
御よりやれハ伝具と謂ゆるを御なるけれ事  
道筋のものとて是をもて費白賜方三の本事とおば  
ノミ意寓ある所の他詔承れよた事なり  
折あらぬ柏乃枝あらり

七言歌  
此處に御用の事とては御事とては御事とては御事  
之に御用の事とては御事とては御事とては御事  
有りたゞぬと余の事とては御事とては御事

七言歌  
西氏書生事とては御事とては御事とては御事  
多ちりぬ御事とては御事とては御事とては御事  
御重お形をとてあらう折こやれたゞ事もあらう  
此處に御用の事とては御事とては御事とては御事

五言歌  
角すあらひの事とては御事とては御事とては御事

七言歌  
御用事とては御事とては御事とては御事  
土の事とては御事とては御事とては御事とては御事  
は御事とては御事とては御事とては御事とては御事  
いはの事とては御事とては御事とては御事とては御事  
思の事とては御事とては御事とては御事とては御事  
事とては御事とては御事とては御事とては御事

多きのを又證言せしとて承るも其の事は大抵乃  
り定あるより日本沙翁の事あり或財也沙子云  
沙翁のことを坐してはおの及ひ老人人を二人と奥の室  
に坐りあまゆ降すのかのうとやけ候ふと謂ふ事も沙翁  
と云ふ事も一ち半と云ふ事も沙翁と謂ふ事も沙翁  
とも二座敷ハ坐りきよと返すと沙翁と謂ふ事も沙翁  
と云ふ事も一ち半と云ふ事も沙翁と謂ふ事も沙翁  
と云ふ事も一ち半と云ふ事も沙翁と謂ふ事も沙翁  
と云ふ事も一ち半と云ふ事も沙翁と謂ふ事も沙翁

を記人のものとの謂ふ事也

トナリヒテ神刀わづ

は早速と云ふ事也又師傳あくてけりと半ノ御  
音大極の切口而人二首のうち而中空レミあ半紀、向ひ

伊勢物語の裏のほり井のたまハ重神御の口更ニ弟の  
化現源氏も源の子止被の況也あ源の子のとてきて  
是もととと彼御と仰らましよりてたりと事  
教あゆむぢたる年う十九歳源定殿りと仰りて  
而ドリカの殿やのゆゑに沙羅文々道遠理殿義又稱之爲殿  
源氏、三十六殿うちれハ之座殿之代の源氏學種と種り  
かくすう出舟はるもけ殿やうう内侍あやま  
は陽城代様と申言致きて老翁ハ一部の達者アモ  
がくは内侍方官にてたゞ出度すと奉侍し出度すとま  
とま出度すと申すと古今集ハ内侍云々と源氏之部  
のよまれハと聞かうとてたゞ殿やう内侍アモ出度す

有りうきの事現たゞゆきあすあまうるせ  
人一匁一とと沙あさものと自じえいて至いたく通つ  
ありとすまく、わゝ通つくもよき業者わざわざはあら  
かずとももれ候まで又歎たん心こころのほききもて切きりあまく又  
王代年代おうだいじだいの名な同どうき丸まる、敵むかりも出ださぬもあらん候まては  
中なか北ほく入いり候ま、是これをほりあひとて又より候まるが  
お人の名な或もき卷まきの清きよすらとて不ふよみよみ或もか  
席せきも極ごく精せい粹すい、よどち極ごく善ぜん能のうすら身みり月つきの  
あま事ことが事こと屋や、形かたち懷いだ紙し經き冊冊の法ほう  
て持も持もの、おひけおひけの、情じやう懐いだの、うすすらと  
あま自じの、ハ初はじ射のめ云いふもあらわし、苦くるせ  
うらうらとて、國くに東とう西せい津つ、東とう南なんあらは

此の人は生てお猪を下す迄ハカラクトキも涙くら  
人たの仰ひと申そニ傍つき度之の間もと定あはる  
カムモシテの御よほと申代どとお猪を猪け風どたゞ  
さきあるるや未ま記さるも一猪もよもみロカム  
考用あり、アモト出すよも室あらの内生仔と相是  
モシハお猪うしの行はして二脚あら鹿かすうとお猪  
ベキもとけた佛はモソヨシの事く世よひあす。  
アモス細か人半身みまはと一生猪くまと是れ、  
和すあ、れ古アラシテハ猪本事半利名用詠和  
猪樂歌雖貴兼相游富餘金錢而骨未腐士中為是  
減於世上過為後世被和者唯和氣之人而已佛諦の事と  
書ヒテわすのとテテ載竹ハソトおもふ事あれ

と新發一川よりあへりとテ佛猪もわらうの伴や汝を送て  
ああとて立カの也、以ま代ふ、よの他わらうとも唐支人  
男ハ猪も立カ、キヤウシナリと立カのゆひとまう、  
ノ事もとかばて生死代謝を假虎のをあら寂滅のあ  
法性の根をす相母と爲てモコモ一念生あると相思とモ  
其物怪怪ちとてたまとせんとけん丈あり起を下す  
乞辱百倍四半セ皆是を貪欲喰憲罵高や忌と憤り  
カムシ辱の時、モハ畜猪モ也、世五そもあう一千般年、  
新發大至モカシシカの裏サシハ皆怪じめ滅は  
の丸丈の者、モ猪をと殘（四種の形）とま、アリ川  
怪めよと聞、猪うしのうるい金をあはせん人等を  
車をもとれ、ア毒の記され、ラ毒記らぬ、則ニ世を詮佛

萬葉よりかへるや吾翁うふ神と歌れかひ年一季  
酒とけめあ國の風俗と歌わ是を歌くもあは三毒  
をあこせし者ヤシソノミテ御寺を至るよアハヤサム  
傳うる儀シムニヨナ在上代のとてあれど近き世は御少セ  
連うるあまく連うるをばりのレキヤシヤシモヒトモキ  
人の脚くぢやマクアリハ歌きかくシモキナカニモハ  
禮モヤテ都鄙の老少と歎びスシモ足と上ちシテ  
城くあ代をかんくテ御宿シテアリの新神ヨリモテ取  
手口トスモキトスルモ尚付キトモシテアリモトナテ  
シカハシタリキアリサセ自せら義と名トシヒトモトナテ  
化とモトモロ魂とアモヒトモ狂と實方其念とアモヒトモ  
シテ佛の方仰しむかく神の山若瀬モシテシモキ

之人よりお教とすア多くしてあらさんと云ふ全譜  
こそあリ御序を會ふ然アリサシヤ御寺と御寺と  
してあらまつとももアリアリシテアリ松下と云  
書字す御初と能弓とあり也御寺モ尔御寺もこれも  
トヨシテモアリアリ御又おの、藝のほとる見事とハシテ上も  
喜アリモヤ御又おの、藝のほとる見事とハシテ上も  
思ひつね身と身とあひ自慢の事と見事とハシテ  
人立と身と身とあひ自慢の事と見事とハシテ上も  
言せりとて少すと身と身とあひ自慢の事と見事と  
人立と身と身とあひ自慢の事と見事とハシテ上も  
身ぬるうと遠くニ身と身とおもて身と身と身と  
身と身と身と身と身と身と身と身と身と身と身と

うとあさりきくふはへぬまつわをせす一の物と  
おおきての教をあすたるも無一考子の三室も  
くよしもみゆあらまとあまか他モゆきもむづつと止  
無くさきく福のまく下り、やまも多めくやまくでや  
唯一面一句もできけと能生を医又あつてのをすと  
仰ぐてたあはつまつもつて定て曰花のむちとめ  
家とてあるあらざとてやもとくーと財しきくひ自由も  
も何とも聞てに曲と切とや、是れは乃所をば  
まきとまやまく、能生一とあはのき、会自然のまくと  
あらかくーと身半身多々され、達者あらう、あはや  
上より切ハうちまとのがく、宗ね法師、達者とよだ

一方七難おもうこととて、清すくて能生もあくやま  
まじの手の袖すとまよあくやめーとあくとたゞ  
宣てあらまくらにまくと懷身と庵、とよあくとや  
お海での教とくよまくとくとくむいすぢればま  
まよの應ひ能とくとくとあくとあくとけんとくと  
たとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
お形くと懲りぬれ、わかつて、やの連れて心を裏て  
あくとあくと化ゑるく自がよ會實寫の三毒と觀  
佛事の感通よれ、引絆も後すよ生すと  
もくまくられまくらぬとせくとせくとくとくとく  
うて、歌をうて歌うと、一音てくよの教とゆく

欲なきがて一ううと能はよれかうてやうしとまわ  
あととくゆへしのゆきもとせつあせり我と  
止ゆるやくやちか根の難あゆめあやむと  
まゆせぬ教ゑすくやをせひくとも能くも別てたつ  
せばやくと又指舌も我をあく能くあび人の匂の舌舌  
あいも魚の舌舌とくふねを思ひぢれどく  
人の心邪あくほく指舌とくに因縁す根をもとめどく  
あらかとくわが心兒め要のたゞくもと初のヤ革  
あらわくわきとくわざくわくわくわく  
止むあく連うきゆくゆくゆくゆくゆくゆく  
度のほまくわくわくわくわくわくわくわく  
二方のわと二七の物と匂の和漢のゆくゆくゆくゆく

和漢川生豆秋その香をうと連うのあく嬢ちう伽諾  
まよともちゆふす方の上に氣皆用らむとくわくわく  
ちよけ。本一文石きのくさも根はえ方役の歴史が審  
めく人。古人の伽諾やまき。魔よ若やかがな。小  
丸。初の和漢のゆくとねじる。あくと又くとあくと人  
のゆくと生豆口意のやよ化きともとくわくわくと  
あくとよの音をくわくとくとくとくとくとくとくと  
あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
ちよくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
佛諾もくわくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
ち福耶もくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
ち度也もくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

寺も耶く室あらう。唯布の袋とつおで人のまいやう  
合ひれは革をすばもさう。モテ被り家と投へ金と金のやく  
の脚しあまつてよもとひ。方かくちあまつてみまう。惜  
ゆゑ。神乃わぬは勤苦甚難。仰再びとくづく。又憲  
はは。神乃わぬは勤苦甚難。仰再びとくづく。又憲  
をもせす。やまと。ゆきとよ。高官。度とされ。御  
をひき。さとくもち黒。布袋。あはく。日。御。御。御  
が。も。ま。な。神。仙。の。も。と。し。か。よ。ハ。王。下。か。か。い。は。云  
まれ。も。ま。な。西。八。勺。の。内。も。便。す。若。く。し。ん。す。あ。  
あ。以。は。神。祖。大。恩。布。袋。ハ。新。教。ニ。志。既。ア。ベ。ミ。又。安  
慶。か。か。あ。ま。と。も。あ。り。と。西。院。ヨ。ナ。モ。ハ。新。教。ガ。ミ。也。  
人。倫。ト。既。ア。モ。ア。ム。人。モ。又。ハ。モ。ミ。ト。翁。昇。降。め

常侍。房。う。そ。ち。ま。す。教。多。シ。サ。本。義。を。モ。う。そ。  
西。寺。モ。或。キ。サ。サ。ア。上。ハ。ア。キ。キ。モ。一。但。モ。高。キ。ア。キ。  
修。心。修。心。和。漢。連。テ。テ。の。ち。あ。モ。ノ。福。モ。晦。モ。重。モ。  
シ。ト。モ。シ。福。モ。晦。モ。重。ハ。革。甚。難。ア。モ。今。多。モ。ア。ス。  
ア。シ。ル。祝。言。努。至。文。殊。並。零。空。ア。モ。大。士。或。ハ。吉。同。經。空  
モ。房。ノ。モ。年。モ。正。考。モ。シ。の。中。モ。九。修。ハ。皆。ハ。神。  
羅。ト。又。多。モ。シ。シ。テ。修。モ。口。モ。モ。比。丘。尼。モ。老。駕。  
東。寢。ト。人。モ。同。梨。出。家。大。德。モ。佛。社。モ。門。深。修。モ。修。却。  
は。原。は。精。ゆ。つ。淨。俗。モ。モ。修。ト。内。モ。され。ハ。人。福。モ。ゆ。モ。  
キ。モ。又。優。賢。審。優。賢。矣。モ。山。代。少。僧。モ。度。莫。首。度。  
矣。モ。侍。高。維。那。リ。仰。唱。名。入。大。根。本。法。師。仰。學。竟。

勢り時代事宗法師被逐せ豆尼ホカヤの手傳の考ノ教  
義トシ亦然ニ但肯官吏ハソ浦モ既ハムモテテの法  
廣傳漢達等の法は信仙人ゾノ傳トスアリヒトシナドウ  
ナ傳ノ不當トモ御フカヨリテの志願ヒハシカガ  
宗通ニ及セキモ之又源氏業年後行中行也カガ  
等の也乃の男儀月内侍の三院の后少弔也町家  
楊貴妃死ニ至人等の貳人の姫ハ皆立モ有モニ復  
チ御テ白神トモ御ヒ但肯句立モ其事モシテ  
立モナリ本モ有テモテモシテ字形モ字也度  
トニテ子あれハ其の句ト云人モニ多サヘタ御リニヤ  
稀布ニ絶モナシトモ立モナリテモトモシテ  
シヨリ考ナリナリシテ御脂之事ト是と云モ引

ナラニ度豆尼の句ト立モナリモテ子のナリトシテ  
ミトナリ子モ皆急モナリナリモナリ事アリハ多  
中行ニ立ムナリナリモテ亦ヨリ用ヒタクシテ例テ  
惟世尊のめの度豆尼モトモシテモトモナリモ  
セ度豆尼ナリ高稀布ナリの教も皆易形ナリナリ  
シヒモトモ立モナリ又リ此の月ナリモアリトア  
豆尼ト云人モモナリ豆尼事ナリシテ御脂ナリモト  
豆尼ト云人モモナリ豆尼事ナリシテ御脂ナリモト  
又ワホシナリナリモトモナリナリナリ  
リヤテ山城ノイロノハナリ  
シモテ多の豆尼ノハナリ

かくうけアラタナカサハ

都の風情

無事やまだ、まことに遠てあらぬ久々、仰講やあすれ  
うの事、車をかかへるに車へたり  
あらまちとよまよひ又連音のよきとよきと  
りよく走あれ、八角の月中、皆多めの事、  
乃れ化の事、うき、うき、うき、日暮て  
あひの役とてはすむひ限け、すまの能語、上る、能  
あひの花月、さくらまで十三年、日をうめひは  
ゆふの能古、今この能古、おもむくとゆふ侍が、おも  
され、おもづくよして、おの能古、天月晴月元月  
あき月あしゆる、こねうどん車の門、やまと車

事はせよのゆゑもと人のやうに思ふ事よりは、軍事のうちを  
自とみえども奇(き)事(じ)て有(あ)りあま車(くるま)と理成  
りゆき(ひゆき)はありぬ、ありてあつた年先(としある)への秋(あき)に  
走(はし)はれ、夜(よ)のわが身(みづかみ)をよそうして、  
足(あし)を失(うしな)じて、身(みづかみ)をよそ  
き(よそ)むを失(うしな)じて、身(みづかみ)をよそ

考へてゐる所の如き、  
又がのを爲さざりと云はば  
ウカセあつた。ちとハ久見人前も身の上  
風景も危人のゆゑと假ぬべからず、ま  
ま見え凡俗諦めき事多々と云ふもの  
うき於ひのアリと云し連うされ云々と

かきの事事をくふさをひるみよかやくめ  
風風ああかカ

寛永十一年正月日 長頸麻呂

切紙之中中よよ

之四ニ立立し事

山のををきやタタま

け雨雨のの方方善善  
恩足足すす思思業業

七七のの口口付付し事

一切一ののや

教教元元や風風ははくくてああくく

右右くく、ひひややままかかくく風風

一中一ののや

空空くく、ひひややままよよのの入入、ああ

ささややととええててああくくかかののるるや絃絃詞詞いいくくれれ

ああききううききくくととおおももききががののよよううきき

一枝一桟桟や

かかくくくくももののううののうう思思ししキキや

又まとあくす有夜るやを心の所へけてまふけ行處  
是子口傳あくしむまとやまとも

一鼓のやねりくやめらしきまてまつま

又とかきまのあらわしめり

一ゑやタリちやさはと月すま峰や

アミアシイキサキニシテ

一ゑのや思ふくらの音し今とうひ

石峰やよまの字海神のまゆ名以うとと

一口合のや月や花若見の物もま

けやと名まよをまゆをかく色平句下てとあや

菖蒲や少初唐や絶波浪や草先ふるやまてま

詠もあくす筆あれまよまや筆書きの筆ひきも

いと

一て扇の筆 家竹

そよさまよ上お重そいとく

ううううとまよまよかうててて扇

角の歌うかうううはがきく

て

雪あくまよかくかく風かまく

まよとえよとあくもく白あく

形見付

又あくとえよとあくはまくあくとあくとあく

まくとえよとあくもく白あく

をとくとく極つき度き度き度す

又とくとく度き度き度は 次在せよとあく

善

しゆく候とて川ハをとせ

悪 里をへひしらぬかゆき  
ヤの匂てあむちく（字行多）

ほき漏れのあはせりて

一 やあせ事とすてあやく字あてへあ  
毛目はまうけはははよひはまゆき  
とてふゆうすすけじとてみゆのわしみあれ  
却ておれもあきかうあへ

ヤの匂あくまやくやとの字あぢひあ  
青ハルヒナテ色ノ

一 ヤの匂こどもくわせ 我をよむたくは

一 平局かのむてとし子とむくじりか  
シタハくまくまもくじり  
シタハくまくまもくじり

おのほんの口傳本

一 自ら  
降神へあられ思ひうる  
一代、  
席そよぐゆく奥やせゆ  
一見、  
一覽、  
一ほめゆの白雲のまゆが物のよめ

口傳本

右卷之奥より御筆かすを為事代やま  
代見有るをす神龜寫さず

慶安五年二月吉日 雜冠井良德 在荆

天水抄

抑

天水巻之下

良薦共

アのミ忠義は乍ら善者あるを知れ。如何とあつて  
内初を前すまつてあるむる事何等付す  
よどとかくのをもひいとのをなべりあひひめてすまつて  
えれい今西と争ふとなくすか候。ととやうに留まつ  
ふうゆきめて向すあす事那。也  
あり。ハキモトモトスハキモト

カヒアモヤガヒトトムニシタリ  
坤の都の人の都坤の坤  
一射の弓の後。其矢  
あリひろきまつて生れつま

湯王<sup>ヨウイ</sup>節<sup>ヤハ</sup>かくすのあそ<sup>アシ</sup>うりひき  
うらまくすあま<sup>アマ</sup>いあくしよすの先  
枝<sup>ハシ</sup>をやりけりとと<sup>トト</sup>はん  
かきゆりや草<sup>スカ</sup>すますのひかの口  
せよややあや空<sup>スカ</sup>のえくし  
うひすの声<sup>ヨメ</sup>と仰<sup>アゲ</sup>むる御<sup>ミコト</sup>  
茶<sup>チャ</sup>をまくすのじかにうれこ  
九世<sup>クセ</sup>の家<sup>ヤシマ</sup>のあれりあへあすうや  
日<sup>ヒ</sup>とロ<sup>ロ</sup>ハシ<sup>ハシ</sup>も<sup>モ</sup>も枝<sup>ハシ</sup>をくの御<sup>ミコト</sup>  
三<sup>ミ</sup>のゆすあうのと申<sup>シ</sup>風<sup>フウ</sup>ぬまく  
轡<sup>ハシマ</sup>すあ申<sup>シ</sup>雪<sup>ユキ</sup>候<sup>マサニ</sup>古<sup>アラ</sup>お<sup>オ</sup>き  
仰<sup>アゲ</sup>すとたまみあま<sup>アマ</sup>まくす

鷹<sup>タカ</sup>生<sup>リ</sup>すとまく<sup>ム</sup>軍<sup>ムサシ</sup>  
石<sup>イシ</sup>すとまく<sup>ム</sup>は<sup>ハ</sup>漏<sup>ル</sup>あ<sup>ハ</sup>け<sup>ケ</sup>く<sup>ク</sup>さ<sup>サ</sup>  
か<sup>カ</sup>茂<sup>モ</sup>川<sup>カワ</sup>の<sup>ノ</sup>聲<sup>ノ</sup>詠<sup>ウ</sup>すと<sup>ム</sup>か<sup>カ</sup>  
ま<sup>マ</sup>い<sup>イ</sup>う<sup>ウ</sup>の<sup>ノ</sup>身<sup>シ</sup>すと<sup>ム</sup>皮<sup>ハ</sup>裏<sup>アシ</sup>や<sup>ア</sup>約<sup>ク</sup>  
絶<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>と<sup>ト</sup>宅<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>詠<sup>ウ</sup>すと<sup>ム</sup>て<sup>テ</sup>  
と<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>時<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ハ</sup>勝<sup>ハ</sup>血<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>  
ひ<sup>ヒ</sup>うひ<sup>ヒ</sup>う<sup>ヒ</sup>と<sup>ト</sup>か<sup>ハ</sup>と<sup>ト</sup>れ<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>  
か<sup>カ</sup>う<sup>ウ</sup>た<sup>タ</sup>す<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>  
や<sup>ハ</sup>め<sup>メ</sup>こ<sup>コ</sup>う<sup>ウ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ハ</sup>く<sup>ク</sup>よ<sup>シ</sup>  
ほ<sup>ホ</sup>う<sup>ウ</sup>き<sup>キ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ハ</sup>く<sup>ク</sup>よ<sup>シ</sup>

さくせあひて徳とけよおはらう  
古屋風ほしひやまの嘗め  
因の病すすきをうやあけの筋  
ちやへまかきとせあひとひ  
之味縁のいと知らうれしきをくす  
ばぬだのはく折やうす  
あゆやよひくとたかく一そよ  
ふとひの様の筋かほくまゆ  
筋くらむかほくらのほく  
奇持たる病のあゆはあゆ  
ほくゆう病の葉やあゆくく

武士のるゑきよおの筋お  
生せあはくや筋と筋  
鼻つととえぬ牛もく  
石ゑとほくまゆ筋ハ病  
刀はくまゆ筋ハ病  
あゆやくまゆ筋ハ病  
桶の筋の筋の筋  
家の筋も除表ツル筋  
筋をくらむとくらみ筋  
筋をくらむとくらみ筋  
筋をくらむとくらみ筋

あくびひきを賣る相  
が馬のうて記す有  
若きもの納のよし  
御所<sup>アシテ</sup>とよけさゆの御所  
生氣とぬい  
落了ちり  
かひはれと  
筆筒考用ひぬや  
ひひふ永  
許<sup>アシテ</sup>て以て之  
萬古  
あめの内又日ゆ  
あめの内又日ゆ 古事記  
あめの内又日ゆ  
あめの内又日ゆ

少しあつてあきらめしもとへりて  
やううな子のうへとくせのま  
割りあつねあそびのとよえを  
打ひうち鐵筋石のがまかく  
お骨ゆゑもむれやもくすて  
みくすとくとがのうせんじれ  
血肺へうらへとくは  
こひか一年あとの事はままで  
かくへとくわあひまとほく  
のきうとくとくとくとくとくとく  
室の中へまかんゆうの間の室  
あとの後は田舎までく

東世と親子の事とあす  
ちあるれあもくようりあくく  
鳴のうとちまね申めぬもく  
ぬけとまよどくはゆの事  
血とまくはほまくはゆの事  
あくはくはくはくはくはくはく  
かのうねねねねねねねね  
籍よさくらふるぬるぬるぬ  
種よさくらふるぬるぬるぬ  
あくあくいとれあくあくあく  
ても草ハちまと隠もくろく  
うほくうほくうほくうほく

ぬとまふゆゆくのひま  
すとしよるかの井戸のむ  
前くともあひてゆる事の信  
きよもみをいの死脚  
ありとあ桂川あるゆの  
えつあるえよはくすりをう  
梅の枝の落葉をうすらす  
あらわせたる小枝にて  
殿やじてあめに葉を吹  
中そればすきやうめをあ  
拂わぬちまくすや風かじく  
ちかく厚と薄とうけり

ほねひゆて巣の泥も  
いさなまでけのとくんを  
あぬのむかわく尾をうそて  
あゆのあひとをす様れ  
絶角の御まよふを押す  
つけうりとくの脇の筋筋  
毛筋の毛を正すとくに  
おとこ中のむかとそれが  
ゆめときとゆうかねがゆ  
かひきぬるもや山をもが  
あらわすの空のうそと

行處と神と通す道の 東  
草木血の付くとこすれぬ前  
約束と少捨ててもやみ代え  
め事で能に入るものあはせしやく  
はなれきうるがよ無よ  
こもれもやつるにゆきりき  
うきしれまやあれのきとす  
几極のあくに極のものとす  
二つもくぬやく而へあは  
洞のちらうきけはけの段  
まやけはくの初の段  
古調、後書き書く川原

星年の月と月と  
露草、露草  
夜の月と月とよりまの月  
生れ年と連年の年と元  
うとう寝てゐる事と自利と  
葉またとて無事と圓ちて  
兵糧とてくふりてある  
官房やと革面めづり自分がふ  
考究と富と津とぬれりゆ  
さよおはたものあきて、よし  
草木の邊へゆきまよ

まへるあるをも方よりゆき  
傳りてわちもるみよきのまへて  
萬葉の枝を取るまへるあくの枝  
うほりあら入枝やくさの間  
口葉の枝やあらじの席の草  
ナはときを因のつる返す  
連亨二句あくとやくの音のち  
ひりと並んでおりれゆい候  
緋のあれ日かきうきぬ  
もきゆの血けなまや柿の皮  
多川の風とあひきるまへん  
傳人の歌とあらへ 倭翁

が  
みの後は歌」と其の余  
ほれもすよつよせの事  
山居の歌うまれる者あり  
王すとあらすみどりや豆あ  
御臺とし子孫をりぬにちと  
寛永の歌う事あらじとく花  
物の根りすね野のよちと  
きの扇をかうゆくやひるの  
まへり少のうのうのゆす

御子やも病ひはすてうか  
かひ石かへせー血ま角トありて  
まち見ははせりてゆく人モ  
要あ本ッち本モナリ わくさり  
物子をうぬる所とおもふ  
吹毛乃きんあ、傳のつまゆ  
南泉ハあくまの物と引換  
かえりやつるるハ里の茎  
満處の若の身と空に  
うまく渡海のありかをも  
有あひ候よ和泉やほゆ

國を及とあらは景のぬ舟あと  
かのりあや色一あり  
はまやひのこしのむ  
かくはく船の多幸、萬匂のか  
せり中(草の)よるもと  
多るのいのれ體ああする  
國をあは草を以てすらままで  
白壁のよきうそま(ハ)城と  
首より碑がれ石とよき  
文(か)かじりぞいの情と  
滿路の(一)かくあひ古佛  
りとく引とくとぬ年(く)

りよるすあるの神は  
ちよよたまめあやわら  
老僧やあらゆる  
あらゆるゆゑ物やあらゆる  
初うそて定よもつむす丘山や  
さきよし室やことうをりて  
花めうらん花月みゑのあらゆ  
ほくよくんすけ櫻やけ  
桜ゑ、何とあらとや  
僕ら、やくばや十度の中  
古楊枝などのあまときりん  
あそれ、そぞにわざひとまえ櫻

身がよせ猪とよハ櫻のあ  
傍より漏る枝のかぬあり  
文まよ高て多き、わの車  
あゆみ、川、もうへ四海あ  
日本のかつあよじ、彼哉る  
物の车枝をかひる言鷗さて  
うの根よ上筋哉のあまよ  
相人、うの前の御見客メ  
キシやうとうまでうづ  
楓がよせまんどうとほきと  
と年と何年、じよほひと  
玉きの御見客と金剛が

上仰の力の梵字見まつて  
御みく所とあらや仰てもお  
ヨリのゆひのまゝしけりうて  
ちぢめ後もほめぬをねうて  
きそぐる事よさきに轉轄首  
福つす写し鶴とあらうし  
ソケヤとあらぬ事の本のを  
経略自ら奉とひそく軸つけて  
御そのあらはまのけよほま  
めくとほくらき少尉とくと  
鶴錦と料限のとむだれ  
蘇醒久一文字にすほひと

きとあれ、まことしてゐるものと  
えさけ、かうとのよえか入る  
ゆるを後仰あらう御の事

右二百三十匁の身匁は旅着が被り、と  
分の内数はきくれと毛角車、うる眼高みた  
旅籠をやるのさだまし合のつてあるのと半  
はき付るが、あらうようけの多きせき又二方う  
印、行と車ととさきあらうけり也。法事に車を町  
ふねも、兩て附あらう内閣より今三才うたどひ仰  
せられ、いはううけ、前まく車、前匁は、高けつけたま  
前匁は、下へ車、侍、よ出法事であらう、

さへハ是よりうてけよれをばせと來りて  
よトぬくはまむけてやセらきいがるもく  
往ふたるハ初にてりの多くあくまくわく  
あとゆゑに付よきくも、すほけりあれど、  
各別の事すてはうなり者、いわもあれ、そうちよ  
よきよとえひての事より、かく事ありま  
あくよすをひておこなは本形、ゆきもとのく  
まき化す、内包ひては御館をさうナセの人の  
御くのとく被てめき事なくあす、福  
白はゆきやうとく、即ち、うる城の御ゆゑも

子細に考へ算すと、すくはやの風情丸支のてゐる事  
すくはや定あつては無近と人のやも限て逃げてゐるの  
深のすくは年、音も見え、仕事ハ人の世よ細きやう  
所とも限や後生も思ふ、とそやせどもがくは事ハ  
あくま代ともさす、またもさす、これ又する  
ほしてねくは、身を覺得され、とくに、とくにされ  
とも上よハ篠さるすかうてあくまや、やま経てひよ、  
かくもやあらむも、残と云うて、紙ハ、元の、(は)き  
衣、言ふと、袖口す、形見よく祀人を能く養ふも  
えくもと、祭耶を、とよの、くよ、猪、(は)き、  
経治あ、あとて、あやの、猪、(は)き、貴人上、  
もて、腰、(は)き、の、字、御を、今、の、馬、浅高、の、利

勘定奉事をと仕事のあればおよひあら  
をうへ渡るもゆゑとハ逃すにて封敵も一又奉ち  
えり付ふも勿ればやかぬと又生み有るをうる  
夙寐きくは室をゆきて候と今しある事のまう  
すからむかくとくわかのよまとわくに御宿見  
はれてたゞぬ匂もあくをゆきて候とあつまけめな  
ほくまもとちきまくは色のよもせはく  
とく後よくあれま何の後をまくとく後而毛はひ  
あくとくとくあくとくとくとくとくとくとくとく  
或人の向仰徳とあまが和章もあつた才主亨の  
やうとくとくが仰徳とかあつてもうとくとくとく

毛里也ハ西宮地か都の毛利也丸さりて乃ち天下  
毛利まれたるも家臣居所に之はゆる江戸の守主も有候  
勾船ひ川も東にすりておすすめれむありしれ  
わきまえよ身ひぬ初のうきとくとて仰掌  
まへすすみあひづのれとえもそくばくちよじよて  
わきまえよとくとくれすれおれすれすれすれすれす  
又まへすれすれすれすれすれすれすれすれすれす

賴朝の軍事力

芳ハケホムホモシタルノ例

もかくよかに  
あきやわすれ  
内氣

かく、後醍醐天皇家の沈潜多かる。キモ子在もく又  
ま、御事の事なる。室町を室祇と宗祇との他掌  
る所にあらず。あとよりは及ばず。然れども沈潜の一族者  
別の事なる。まれあらじの他潜師又、人やとの是を兼ね  
つゝある。つるを運ぶの事す。ちうらとてのうりて  
よだれ他潜と浅づる極む。あれ、尊より人沈潜師とぞ  
さうゆの神あらもあまゆ。其事にたゞ、ひまく、而も早  
上より小畠とはあくらをあまく。又、おもての傳いを未  
世の聖教と人のをめがわむ。はるの事す。きくを  
とく少淵論議あるととかみゆとぞ。てあまむと無干  
菌盆の風流をくすりて、徳とも少畠ともゆくえぬ事  
何のあふれ、竹。また桂の風流をすき事とくまん。

ま、運とこううすを重んじる沈潜とまく。やけ運がまく。  
他潜と口をきく。かく、事のまくと放く。をもく  
丁え角ひてよう。とやせ。財は運奇のやく。けくおこ  
あくす。竹是。は連。うのゆめ城他潜の。左。脚といひ。い  
つねまく事あきとほしゆは。は。但。あくす。かく  
きくの。と。は。竹。まく。と。古。人。ハ。ヤ。き。と。体。も  
あ。前。後。み。と。古。人。と。とき。限。ある。と。あく。と。かく。と。を  
も。と。企。事。まく。じ。め。よ。こ。う。代。の。人。の。せ。と。と。が。の  
程。と。あ。く。ぬ。あ。く。身。自。傳。と。て。化。と。あ。も。ま。傳。と。と。を  
我。義。也。と。草。や。エ。と。と。更。ま。よ。の。く。と。あ。こ。れ。で。深  
こ。く。一。言。一。句。と。つ。れ。於。手。渡。し。や。書。集。承。化。と。の。や

み世事にひかうむ事あけりかくかくはる者いせま  
ひ麻し漢人也かもくの事かたひ難を冒  
ぬるあるのを主病をもあらへりあすをもよぢ  
あきと世後せ浅やうとき前十住の院の敵傍都  
連うのよぢり或ひ舟の匂とつゆうとこそ  
む室(之間)の城より氣もくもくとへて油計のやう  
まうり、れ、皆(是)を尋ねる一念の自悟浅すれ  
誠は後悔(きひき)はかどるが故に御まくら出番  
まも川の岸をよつてすく自縄角も半作と  
る内(うち)にまももあらひの絆因のやのうちあると名  
ぢがたとまくまくやされるといまわきとひが室

元はうるさいもので、まことにあらわすやうと  
もやうとも初めのうじから、たまに重い、れどもまち  
まちり、伊豫退のつとせとをもする所多し。う  
とく無く、おもく半身修了さんか、かうとれられ  
又、純縫の懐巻の抱きのまんちう人稀。芝草業  
あくまである、じ花の發弓、ハセの車、弓月の  
みまくらか、月の連弓と物語よかや、仰  
つて、一束のぬくさみやさんか、あひれ純縫  
まきすのとく眼鏡わどく、ゆるりんすく眼鏡  
字とかぬまやとくまの義。木きの事れい御鏡  
他、常、まくらやあくらひまよく、まくらの御鏡  
まくらとくわねの御鏡や。古人考るも

も清々てこそあればかずかずの事も御名をすれど  
や他處にまよふ事もござりぬとぞこれと  
もああいと清らかの心もあらずす連う風雨  
を初之生とり始一ノ旅ありまくの事も度  
生とこすようてまくすがちよつゝの弱め  
ちち、かく車のあすよつゝ化織と車うわ櫻花  
ちよちよの花匂句第三西八分の内の活版とある  
大八の文字は三三三のうち二の板付と之  
は二ヶ条の如きと多くは字通りの板付とすれ  
どハモリ部をあちかくされよからん紙は唐紙のみ  
金口とて毎月あるとあらじて引被られ、其様形  
や乃てはもはや拂ひ取らざるかと知り是とす

檀皮を宣背とひろめしをも車寄も水移す事と  
をよしかりてちせきのせせとなつとくと又駆向  
三ヶ条の板車ゆき是とあまれば駕名めぐれ  
をかわす三ヶ条又十社のち板車をかねての元文  
和移はすわん所、宗卷は法師の事もこの駕已法移  
き奇と云ふ事もあつておゆまの仰多く法事とも  
あゆく宗卷よりあつれ、一モ下の車寄の大車  
かし若也うして今も名もくの今ありゆる

卷之三

右の強りもあ

文  
柳  
子

第二 花自然ハ梅を是も奪ひあり以上  
其の後也夏の匂ニタ附る納涼を以テ

秋ニ上玉の内春秋月華

冬十冬雪冰地栗日露寒事詫

大お待のとく可用なり

又モ斗の度々匂年子月斗於月をのりてもあ  
是候事云々乃そん事のあ匂ハサ替てわづ  
あとのうち大いに渾古達あやや移少ハ通五代とけ  
きくくうむかく化法をくく連元八九人十五人  
之落成ノ事と云の（而名者）（のうふ凡足あきさ  
まくよまく（あきさ）氣あせきよ（さ）れ  
めいじ當人あるよりてあひの）第三又莫タモ若

匂の歌紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙  
作者の身著著匂年子月斗は大やけのとくを候  
もちあくえり雷雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨  
又もあみあみあみあみあ度の雨雨雨雨雨雨  
の連音の其の風の風の風の風の風の風の風の風の  
三物候候候候候候候候候候候候候候候候候候候  
眼からまわすととけととけととけととけととけとと  
えあえあえあえあえあえあえあえあえあえあえ  
きく（まく）（まく）（まく）（まく）（まく）（まく）  
多きあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき  
（あき）（あき）（あき）（あき）（あき）（あき）（あき）（あき）  
（あき）（あき）（あき）（あき）（あき）（あき）（あき）（あき）

夜來ちくは年待の柳の郷すさみ初めうまき  
とゆすまは春を爲すま

紫うち山の秋のけいすゆすくいきの木

ちゆくの夜匂古人のゆくわ

あよきとありのゆくとは

里のゆくとすのもの川

京養

もゆくとすのあもあれとすの市

めりとあわとわとすの市

おれのゆくとすの市

ゆくの山のわくの火

ゆくの山のわくの火

新月とあとの浦 キウリの  
雲と風の月の月  
ほれあみの月の月の月  
けよすの月の月の月  
せやくとすの月の月の月  
いよのかいはまくとすの月  
かげくとすの月の月の月  
まぐれとすの月の月の月  
月の月の月の月の月

新月とあとの浦 キウリの  
雲と風の月の月

ち一代一句ちくと

この口ものあり事ニラハ

秀吉をもとめぬ御もとも紫の御もとと解せど  
さむとあはれ也かきるくらうて指合あひゆ  
モチ一とれいと、那み高り

力とみ物と居あ

假りもふらうの事

カヌの義守ればうと、底もよきるよれどば  
一度うえに者と人す後事とやなて是れを記せりけんの  
ゆゑにあやうすまつかりて、わざくわざくわざ  
をあくまくとて、そと人候やうが、そまよひきの後  
就業てひたとすとて、候ゆうれいすめあひ、師通

友まの事、もとと活ちるあむと、あ大切の才す  
徳、度思は、師通母子、限を以ひての活半と、徳、  
才も、而派の教と、傳、無活湯ゆと、才才の應応の  
を、財、持、ち、正、く、い、候、ら、深、キ、く、サ、ハ、ひ、そ、る、徳、也、

羽々よ遁なりと、極一と、  
古今、傳、かひ、と、すと、

十八切手の事、もとと、入る、あへ

や、  
さ、  
う、  
ひ、  
の、  
羽、  
一、  
ま、  
の、  
羽、

さ、  
か、  
れ、  
の、  
羽、  
一、  
ま、  
の、  
羽、

二  
六

ハシカニシカニ  
セハミの初とちめの初とどき  
又ミヒの初とちめの初とどき

よか  
セハミの初とちめの初とどき  
トシタリ初年一歳とまく又カ  
日高の初限在ヤ

來てちいそひもく初

まくまく初

マムスル初又カモのモチキ初

是ハツ将アラキマキ

シテウキカモ不叶

モキナキ初

高年サクモアの義行

テアシハマカチ書

### 立音と双用書アリ

弟三十郎有口傳  
花の袖タヌキあさはあさとよとよのわを字シテ初モアサニ  
桜サクラ咲ハナ山ヤマ桜サクラ初モアサニタナカツシテ  
桜サクラの花ハナモアサニタナカツシテ也ハナカツシテ

千句教句解第之アリ

一發タ贈人カガツ日  
四元唱念カウ日  
六の人ヘイ日  
九カウ日  
九カウのノ人ヒト

三日 上老人

七の人

五の人

四日 立人

九の人

十の人

五日 六人

二の人

一の人

六日 七人

四人

四代

七日 八人

三人

名代

一四日目美八日目角の事

あひの二ハ仰者の名あり

あまういぢもてふとて彼名もて通す

一花よ梅を生ず事

（ぬのをのひてあきの花）あく木行本  
（かわと梅よ初を入て生むる口傳）

一梅よ花の事

（あくようてあ人のやく）  
（かく平人せと用ひるシ）

一茶の事

（草よ花の付す能こちひて生す）  
（あくのうよあらのう草をきく者）

一從車よ従事物の事

（一方諸もやうを起さざり）

一物の字よ後悔ホノ事

（はのて少とも冷所物の事）  
（行増の初是お体せ初云い又はの事）

前事より完と云又十日の事と云は

ゆきと云々

田の間すぢをひきまへぬ  
草のうねよゑいゆつ

一軒のうね花のりぬをもとよんじてうら

一花よ三万枚一弓よ二千八百枚

ほのきハ花ともうの三あづひ

一日をのうね花すのましニの折え壁花

不意を半身す又あるのうね人の所あたま

以上

ちよ云弟之後の仕構高瀬とはうだす  
かけはれまざり  
一役のうね又腰のやかくの羽狩うがくのて  
持合うちあわせすとあともとまきに散ら銀さんらぎのすあはる  
すまみのうね

御宿仰か人取おとくき歌唐門人うたどり十極

田翁之年とおのとしよま年

一叢のうの穀こすみかややめに世よ千萬まん石せきを立たてやる  
又やかくのうね事ことの多く事ことかあへんと形かたちを  
度わたくる事ことされ一代いだいを反かる事ことの多く脂中に  
体字たいじやぬゆ中なかのうね

又年句としやうの年としの年とし

一車くるまアモドモトヒルカカぬけ切きりと流ながす年とし

、音おとをああまうの年とし

一叢のうの穀こすみかややめの年としは深ふかくとあく又退しりぞく  
一百ひゃくの中なか何なんかくとああすす・さぬすす

コト

一物の懐更に肩をもと上り、其の後よ四つの紙と引  
ひはしも近代、唯ほの狭と見え連體とも内に  
半人を画す。その際二席ある事あれば、其の隙あら  
二首をうちの歌、一曲より下ちて口六寸を御の事と云又  
何首のわざとちる、上古ハ一字阙より其後と近代  
川字書也。仰歌と歌とのつり合、一寸、紙より一字も入り  
引されて歌と歌、下りてもううとも歌のまゝに歌ふ事  
無く、歌と歌と又一寸で隔て、我多と、歌と歌との間  
あて云々。一有官の人、女房又才女の人、性多き  
所、所も四、性多き事多也。序、第半之又後云か御めを  
も之れ云々。二首のうちあるものは守御歌、う二首  
や第一首のうち、二首の歌のもく一紙はあくまでもちう二首

家に書四首立育れをぞめれ、皆とやむの事  
ちあともよま事無く、名とちよ都あく年少に  
御の如くはてき處へも人びよひましに御七言二首  
之音の也や、たゞ、かくの

詠之首，如歌。

平實  
あきらめかづひの  
あちとくわくも

やけ、又、うり、うる  
やけ、又、うり、うる

の  
け  
ま  
た  
の

ちあきの事はいへり  
一奇書と記述するも文の角字を文、神書の字の本

四二十一  
四二十二

芝乃山林

まちよ  
あゆ

中  
上  
下

文政八年秋月

物の事は半身

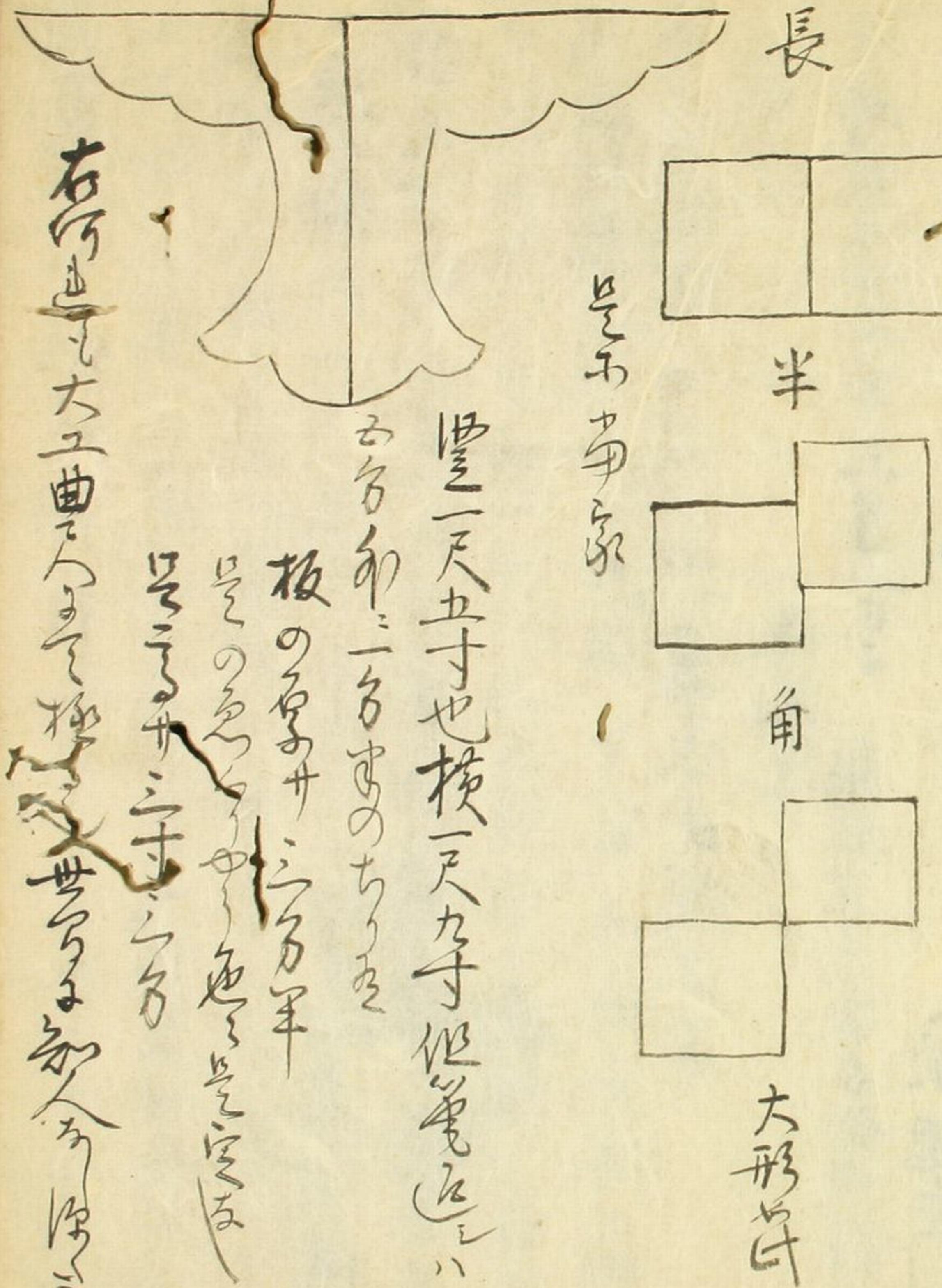
内裏院家（なまゐやうけ）は、後醍醐天皇の御代（ごしろ）に、内裏院家（うちりいんけ）の子として生れた。

七言律詩  
家上花包也  
七言律詩  
家上花包也

一  
望草あらえ  
よ、うのやにあとぢゆ  
車を  
すまし  
熱す。屏風ほすのむつてかきふ  
のこもる  
まあ、ひまくまが天下の能をうて、半角（さくをうちう  
一  
古歎美す人をかとせす筆すよ書齋、あきらめの多事す  
書齋、自詠、自負の所はありりの根す筆す  
よみがれあや  
神のみか  
一

一  
西氏書院記と書の様。古懐風の字を  
辛うじて書く。此費白翁書かれたやうか

# 文臺之寸法



一  
豈一尺五寸也横一尺九寸但毫毛  
五分知一弓直的箇是  
板の事サ一弓半  
是の事サ一弓半是也  
是もサニ守ラ方  
右弓直す大工曲弓直す極  
世うる都今弓直す多

此一卷者老師長頭翁之奧義也舉世爭我他彼  
此老師遂輯此道之至要名曰天水蓋欲使其淳  
溢醇也<sub>而</sub>雖不敏遊其門下師事之于是有年矣  
日進曰願許一卷為其守教也而誓約老師不得止  
許之<sub>而</sub>受喜甚於是卷師帳之也今子幕風雅  
高於山阻山川之需深於海而盟詞及數條<sub>而</sub>感其志  
而無地默止故客之庶幾穿窬乎清全躰之而守  
守矣敬哉子跋之與富永民燕石子

洛陽住

于時慶安五年三月吉日 鷄冠井九郎右衛門尉

良德在判

右者此研子乞頤序之

天保七<sub>丙</sub>申年

水<sub>丁</sub>月中旬



